

## 序 フランスと日本のイスラーム

——「比較しがたいものの比較」の試み

伊達聖伸

本書は、二〇二二年七月八日（金）と九日（土）の二日間にわたって、日仏会館・フランス国立日本研究所と科研費補助金基盤 A (20H00003) の主催、また公益財団法人・日仏会館の協力を得て開催された日仏同時通訳の国際シンポジウム「日仏におけるイスラームと政治的・社会的価値観」(L'islam et les valeurs politiques et sociales en France et au Japon) をもとに編み直したものである。

フランスでは、一九八九年のスカーフ事件以来、イスラームは政治的・文化的・社会的問題の前景を占めてきた。ムスリムとの共生が大きな争点となり、共和国の国是とも言われる「ライシテ」(Laïcité: 政教分離・世俗主義・非宗教性／脱宗教性) の原則の再定義がその鍵を握っていると見なされている。ライシテの意味は研究と議論の対象となっており複雑だが、あえて図式化すれば、ムスリムと「協調的なライシテ」はかえってフランスのイスラーム化をもたらすと主張する者と、逆にフランスのアイデンティティと化した「厳格なライシテ」のほうがムスリムを周辺化し過激化をもたらすと主張する者とのあいだに政治的な対立があると言える。二〇一五年に

パリで二回起きた襲撃事件、また二〇二〇年にパリ近郊で起きた中学教員斬首事件は、こうした議論の対立に拍車をかけ、社会の脅威をめぐる議論に分断をもたらしている。だが、イスラーム問題とはヴェール問題やテロ事件に還元されるものではなく、フランスではリベラルなイスラームも誕生している。研究者たちはおよそ五百万人と言われるムスリムの日常生活にも関心を抱き、研究教育機関の充実やイマーム養成、そしてハラール市場などについても研究を進めている。

一方、日本在住のムスリムは約二十万人程度と推計されており、フランスと比較すると非常に数が少ない。単純比較で、日本の人口はフランスの二倍近くを抱えているのに、ムスリムの数は約二十五分の一ということになる。イスラームが日本で社会問題や文化摩擦の問題として報じられることはあっても、恒常的なメディアの話題とまでは言えない。それでも日本のムスリムたちは、ますます文化的・宗教的に多様化する社会のなかで、一定の位置を占めている。憲法で信教の自由と政教分離を定めている点では、日本も「ライシテの国」と言えるが、「ライシテ」という言葉自体が普段の社会生活のなかではほとんど用いられていない。普遍主義的な人権概念に基づいて宗教的マイノリティの保障を実質的なものにしようと努力する者は、日本にもおそらくいるが必ずしも目立つ存在ではない。むしろ、日本は多神教の国だから宗教に寛容で一神教が伝統の国よりも多様な宗教の共生に適していると語って満足する者が少なくないように見受けられる。それでも、日本型の不寛容や日本型の排外主義が存在することは否定すべくもなく、それはイスラモフォビアとも無縁とは言えないだろう。

フランス社会および日本社会において、ムスリムとは誰のことなのだろうか。それぞれの社会において、ムスリムが占めている位置とはどのようなものなのだろうか。ムスリムにはどのような視線が注がれ、そこにはどのような歴史的な前提があるのだろうか。イスラーム問題を前にして、日仏の文脈があまりに異なっているとすれば、両国の比較はそもそも比較できないものの比較という無謀な企てと言うべきなのだろうか。それとも、共通の課題は存在しており、それがまさに比較の観点から新たに浮かびあがってくるというべきなのだろうか。

両国の政府はどのような政策を行なっているのだろうか。そしてとりわけ、ムスリムとの共生を実現するために、両国の人びとはどのような解決策を思い描いているのだろうか。

本書の出発点となった日仏国際シンポジウムは、このような一連の問いに応答しようとするものとして企画された。

### フランスと日本のイスラームを比較することは可能か

宗教の科学的研究は、そもそも世界のさまざまな宗教の比較として、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてはじまった。世界宗教については、当初は各宗教の教義の特徴の比較か、キリスト教なら西洋、儒教なら中国、イスラームなら中東といった文明的な比較が強かったように思われる。いわゆるイスラーム圏の外部にあるフランスや日本のムスリムについては、世界宗教としてのイスラームの広がりという観点から見ると、それともフランスや日本の政教関係や宗教地形のなかにイスラームを位置づけるような観点から見るのか、おのずと叙述の形式が異なってくるだろう。前者は、イスラームというひとつの宗教ないし文明のさまざまな地域における展開という観点からの記述になると思われるが、いわゆるイスラーム圏の外部に暮らす多くの非ムスリムにしてみれば、後者の観点からの記述とその認識が広く共有されて議論が行なわれることも、負けず劣らず重要であろう。その意味でフランスと日本の比較は意味があるが、そもそも科学的な比較というのは、変数が複数あつてはうまくいかず、他の条件を同じにすることによって、あるひとつの側面の違いを浮き彫りにするものであろう。しかるに、フランスのイスラームと日本のイスラームでは、歴史的な経緯も、社会的な状況も、政治的な政策も、人びとの向き合い方もそれぞれ大きく異なっており、比較しようにもなかなか取り付く島がないとの感覚にしばしば襲われる。それでも、人文社会系の分野における比較とはしばしばそうしたものであるだろう。たとえば、

フランス革命と明治維新も、典型的なマルクス主義的歴史観を当てはめてそれによしと済ませるような態度を取るならともかく、実際には「比較したいものの比較」だが、それでもそうした研究は手がけられてきた。日仏会館でも、明治維新百五十周年にあたる二〇一八年にシンポジウム「明治維新を考える——明治維新とフランス革命」が開催され、その成果がまとめられている<sup>1)</sup>。

ライシテ研究に従事してきた編者としては、自分の専門領域に近いテーマでこのような日仏比較をする機会が持てたらと常々念じてきた。固有の意味でのイスラーム研究については、私は門外漢と言わざるをえないが、ライシテ研究の文脈におけるフランスや西洋のイスラームはカバーする必要のあるテーマであり、そうした領域を専門とするフランスの研究者とそれなりの議論をするには、こちらも日本のイスラームについてある程度知っておく必要がある。

そのような折、二〇二一年の五月だったが、日仏会館・フランス国立日本研究所所長のベルナル・トマンから、イスラームの日仏比較について国際シンポジウムをしないかと相談を持ちかけられたのである。在日フランス大使館もこのテーマには興味を持っているとのことで、またとない機会だと思った。トマンが、ライシテの基本法である一九〇五年の政教分離法を含むフランス第三共和政の歴史を専門とするジャン・マリ・マイユールに、教育学者のフランソワーズ・マイユールを母に持ち、アラブ・イスラーム世界を専門とするカトリーヌ・マイユール・ジャヴァンと古くからの友人だということで、彼女を主軸にしてシンポジウムの人選を考えた。国立東洋言語文化学院（INALCO）で進行中のイスラームに関する新しい教育プログラムの作成と運営に関与したジャン・ジャック・ティボンの名前がその流れで浮上してきた。一方、フランスにおけるイスラームの事象をとらえるには、イスラーム固有の専門家だけでなく、ライシテの文脈において位置づけることも欠かせないと思いい、ライシテの専門家ヴァレンティヌ・ズベールにそのような発題を依頼した。フランスのイスラームについては、昨今はテロ事件とその背景を理解することも重要であるし、聴衆の関心も高いだろうと考え、思い切っ

てビッグネームのオリヴィエ・ロワに参加をお願いして快諾をいただいた。他方、テロのような一部の過激なイスラームとフランス社会との軋轢だけでなく、葛藤のなかで生成しつつあるリベラルなイスラームについても紹介したいと考え、ラシッド・バンジューをお誘いした。フランスで暮らすムスリムの日常生活も取りあげたいと考えた。どこに焦点を当てるかは思案したが、食をめぐる問題が興味深いのではと考え、ハラールについて研究してきたフロランス・ベルジョ＝ブラクレに声をかけた。

それぞれのテーマに対応する登壇者を日本側からかと思いい、基調講演に相当すると思われるマイユール＝ジャウアンには日本のイスラーム研究を長く牽引してきた店田廣文、フランスにおけるイスラームを歴史的・社会的に位置付けるズベールの発表には趣旨を踏まえて同様のことを日本の文脈において展開してくれるはずと期待を込めて樋口直人を当てた。過激化について語るロワに対しては『宗教と過激思想』（中公新書）の著者である藤原聖子、リベラルなイスラームについて語るバンジューにはイギリスやマレーシアをフィールドとしつつ日本人改宗者ムスリムについても調査している安達智史に応答を依頼した。ティボンの発表にはイスラームと教育について研究してきた見原礼子、ベルジョ＝ブラクレのハラールに関しては『日本のイスラーム』（朝日選書）で「日本におけるハラール・ビジネスの実態」について論じている小村明子が適任だと考えた。いずれの方々も快く発表をお引き受けくださった。

当初は六人のフランス人研究者全員を日本に招聘して日仏会館での対面シンポジウムとする計画だったが、まだコロナが続いていたために渡航のハードルが著しく高く、結局オンラインでの開催となった。

日本とフランスの時差を考慮して、一日目は日本時間で夕方から、二日目は午後からの開催としていたところ、初日当日はたまたま安倍晋三元首相銃撃殺害事件が起きた日で、在日フランス大使館も慌ただしかったようだが、シンポジウム開催に先立ち、フィリップ・セトン駐日フランス大使から挨拶をいただくことができた。——ライシテはイスラームとの共生を可能にするものだが、セクト的逸脱も見られ、それにどう対処するかが重要な問題

になっている。おそらく日本に置かれたムスリムの文脈は異なるが、それでも日仏の比較検討は実りある企てである――。そういった内容であった。

対面開催であれば各自の発表時間として三十分を考えていたが、オンラインでは二十分が妥当だろうというところで、登壇者には内容を切り詰めて発表をしていただくことになった。登壇者間でのコメントや質疑の時間、またフロアとの質疑応答の時間も十分に取れたとは言いがたい。私自身は三つのセッションのうち二つの司会を担当したが、上手に議論を噛み合わせることができたかどうかはあまり自信がない。それでも、フランス側の発表者も日本側の発表者も、自分の発言が比較の視線にさらされることを強く意識していたと思う。

## 本書の構成

シンポジウムの内容を論集にまとめることは、少し時間を設けて当日の様子を振り返り、改めてテキスト化を試みる過程でもある。シンポジウムでは切り詰めた発表を余儀なくされたこともあり、大幅な加筆訂正をしてくださった方もいる。ラシッド・バンジューからは原稿をいただけなかった代わりに、リベラルなイスラームについては同じくこのテーマを長年追究してきたアブデヌール・ビダールにシンポジウムの趣旨を説明して理解してもらい、テキストを寄稿していただくことができた。また、シンポジウムで一つのセッションの司会を務めた増田一夫が、全体を見渡して日本の読者に必要と思われる内容の章を書き下ろした。そこで本書は、もともとのシンポジウムの構成を尊重してある程度は踏襲しつつも、若干配列や配置を組み替える形で編まれている。

第一部「フランスの文脈と日本の文脈」は、二つの社会の異なる文脈を概説的に提示するとともに、本質的な相違点や注意すべき点を明示しようとするものである。「比較しがたいものの比較」のために、異なる水位を調整する手続きと言ってもよい。

増田一夫の論文は、今日のフランスにおけるイスラーム問題の背景を概観するものである。シンポジウムでのフランス側の発表は、現代フランスにおける宗教としてのイスラームのあり方をやや自明の前提としていたところがあるが、現代フランス社会がいかにイスラームを位置づけようとしているかは、植民地支配の構造が現在に至るまで「移民」としてのムスリムを規定する力として強く機能してきたことを抜きにして理解することはできない。実際、第二次世界大戦後のフランスの経済発展を支えた「移民」が、冷戦体制の崩壊前後から次第に「ムスリム」と呼ばれるようになり、「イスラーム問題」としてクローズアップされていくようになったという経緯がある。そもそも日本における現代フランスのイスラーム研究は、固有の意味での宗教研究というよりも、社会学や移民研究の文脈ではじまったところがあり、宗教問題としてのイスラームを理解するにも、移民史の観点から光を当てる導入は欠かせない。

また、中長期的なライシテの歴史のなかにイスラームを位置づける作業も欠かすことができない。ヴァレンティーン・ズュベールの論文は、まさにその課題に取り組むものである。西洋のライシテの起源を、十七、十八世紀までさかのぼる一方で、イスラームという宗教を平等に取り扱うことが難しいこと、ムスリムがヨーロッパで平等な権利を十分に享受しているとは言えないことを指摘している。ズュベールは、第三共和政において実現されたライシテと、現代のフランスにおいて支配的なライシテのあり方が異なっていることに注意を向けている。そして、現状のライシテに対して批判的な眼差しを注いでいる。

フランスにおけるイスラームの位置は、植民地支配と移民の歴史の文脈とライシテの歴史の文脈からある程度説明することができるが、日本ではイスラームの位置がフランスの歴史的・社会的状況とは異なるため、比較の軸の設定自体が難しい。樋口直人の論文は、そのチャレンジな課題に応じるもので、日本型排外主義がポストコロナル移民という位置に来る在日コリアンに対しては強くはたらくのに対し、在日ムスリムは多文化共生における肯定的な差異として受け入れられる傾向があることを明らかにしている。日本におけるムスリムと在日

コリアンについての個別研究はこれまでに一定の蓄積があるが、樋口のように両者を関連づけながら明確なテーゼを打ち出してみるといふ議論はほとんどなかったように思われる。

このような日仏におけるイスラームを比較するための地均しをある程度行なったうえで、日本のイスラームについて概観し、現状を提示することが求められる。店田廣文の論文は、日本のイスラームについて長く研究を続けてきた第一人者としてこの課題に応えるもので、戦前戦後の滞日ムスリムの状況と活動を要領よく整理している。そのうえで、日本人ムスリムには「組織化されていないムスリム」が多いという議論を展開し、現代日本社会における日本人ムスリムの孤立と繋がりに焦点を当てている。そして、外国人ムスリムと日本人ムスリムの連帯のなから新しい「日本のイスラーム」が構想されることに期待を寄せている。

第二部「過激なイスラーム」と「リベラルなイスラーム」あるいは改宗の両義性」は、ムスリムとフランス社会との軋轢から、暴力をとまなう反体制的あるいは反社会的なイスラームが生まれうる一方で、西洋の理念的価値観とイスラームの理念的価値観を融合するようなイスラームも生まれうること、またその一見対極的な現実に改宗という契機がしばしば両義的な形で絡んでいることに注目しつつ、日本でそのような相当するものは何かを考えようとするものである。

オリヴィエ・ロワの論文は、フランス国内で生まれ育った過激派による一九九五年以降のホームグロウン・テロリズムの特徴を分析したものである。ロワは、ジル・ケペルの「イスラームの過激化」というテーゼに対して「過激性のイスラーム化」というテーゼ——つまりイスラームそれ自体が過激化しているのではなく、かつての暴力的な過激性がしばしば極左によって代表されていたとすれば、現在ではイスラームの仮面を身につけているという説——を唱えていることで知られている。本論文では、過激派の約二五%が改宗者であると指摘する一方で、暴力的な過激派は宗教的な敬虔さからは程遠いと述べている。

藤原聖子の論文は、過激主義をめぐるロワの議論への応答を試みるものである。藤原は、フランスの外から議

論を眺めるとケペルとロワの論争はあまり生産的には見えないと言い、二人の主張の両方をカバーする形で宗教的過激思想をとらえる視点を提示する。また、その視点では旧統一教会の多額の献金や靈感商法は「過激思想」の定義からは外れることになるという（だからといってその活動は肯定できるという主張が展開されるわけではもちろんない）。そのうえで、日本ではオウム真理教事件以降は宗教的過激主義によるテロは起きていないとし、フランスにおけるイスラームの過激主義に相当するものを日本で探すとすれば、「危険」なのは「宗教的過激派」よりもむしろ「多数派の日本人」ではないかと問題提起する。

アブデヌール・ビダールの論文は、平等な宗教とされるイスラームにも、聖職者の権威を笠に着て、法の宗教としてのイスラームを押しつけてくるものがあると言い、それに抗する形で、人間のスピリチュアルな自律性を促すリベラルなイスラームが、実はイスラームの伝統の核心部分にあると主張するものである。イスラームへの改宗者については、生まれながらのムスリムに比べて、イスラームを個人的に選択したということになるため、よりスピリチュアルな自律性に開かれているように見えるかもしれないが、実際にはフランスではイスラームに厳しい視線が注がれているため改宗という選択は容易ではなく、またスピリチュアルな自律性の探求に向かう改宗がある一方で、厳格なイスラームの戒律に絡め取られる可能性もあるとその両義性を指摘する。

安達智史の論文は、理性を通じてイスラームの規範を柔軟に解釈して現代社会との共存を重視する立場をリベラルなイスラームと規定し、それは特に西洋の若い世代に浸透しつつあるが、日本ではリベラルなイスラームが語られることは少ないことに注意を向け、おもに結婚によってイスラームに改宗した日本人女性のあり方をリベラルなイスラームという枠組みにおいてとらえることができるのではないかという点を探究したものである。そして、西洋のリベラルなイスラームはリベラリズムの価値を前面化させる傾向が強いのに対し、日本におけるリベラルなイスラームの特徴は、日本の社会的・文化的条件のなかで宗教的実践が行なえるように柔軟な運用がなされていることにあるとの見通しを示している。

第三部「制度と日常生活の側面——研究・教育と食」は、どちらかと言えば思想的な側面が強い第二部に對して、日常生活での実践に近いと思われるもの、また制度に関係してくるものを集めた。最初の三本は、イスラームについてのどのような研究教育が行なわれているのかという内容のものであり、最後の二本は、ハラル製品についての日仏比較を念頭に置いたものである。

カトリヌ・マイユール・ジャウアンの論文は、フランスの教育研究機関においてなされてきたイスラーム研究について論じたものである。フランスにおけるイスラーム研究が必ずしも充実したものとは言えなかったこと、そうしたなかで研究者が奮闘してきたことが述べられている。フランスのムスリムに関する研究は、政治学・社会学の分野ではそれなりの状況を呈しているので、マイユール・ジャウアンの議論は意外に思われるかもしれないが、彼女が指摘しているのは、フランスやヨーロッパのイスラームを研究する専門家の多くは社会学者で、アラビア語やペルシア語やトルコ語を駆使してムスリム移民の出身国の状況を詳しく知る者が少ないということである。

ジャン・ジャック・テイボンとフランチェスコ・キアボッティの論文は、フランスにおけるイスラーム学とイスラーム教育がどのように展開してきたのかを論じたものである。フランスでは現在、フランス社会の価値観に馴染んだイマームの養成が課題となっており、人びとの関心を集めている。ライシテ体制のもとで私的な宗派教育は本来自由を旨とするものだが、公権力としても神経を尖らせざるをえなくなっている。また、二人の著者は、フランスの大学におけるイスラーム学教育について、かなり細かいところまで紹介している。二人が所属している国立東洋言語文化学院（INALCO）におけるオンラインによる学位プログラムについても触れられている。

見原礼子の論文は、フランスを含むヨーロッパのいくつかの国（特にオランダ）と日本におけるイスラーム学校を比較するものである。オランダとフランスのイスラーム学校の設置と認可の条件の違いを明らかにし、フランスでのイスラーム学校経営の条件が必ずしも整備されているとは言えない状況を浮かびあがらせている。五百

万人のムスリムが暮らすと言われているフランスで認可されているイスラーム学校の数と、ムスリム人口がおよそ二十万人の日本において運営されているイスラーム学校の数がほとんど変わらないのは興味深い。ヨーロッパであれ日本であれ、イスラーム学校ではイスラームの規範や慣習を尊重するための工夫が凝らされているということ、またイスラームの価値を学ぶのは社会の分断を招くことにつながるのではなく、社会との相互作用を通じて豊かな統合をもたらしようという指摘は重要である。

フロランス・ベルジョ＝ブラクレの論文は、ハラール市場の登場と拡大が、グローバル・イスラームの展開と新自由主義的なグローバル化の動向のなかに位置づけられるものであることを描き出している。イスラームの「ハラール」は、何が食べられ何が食べられないかを定めたユダヤ教の食物規定「カシュルート」とは異なり、それぞれのムスリムが判断する余白があるにもかかわらず、世界じゅうの「ムスリム消費者」が「イスラーム法」のもとに置かれているというイメージが流通することは、「原理主義者」を利するものとベルジョ＝ブラクレは論じている。なお、ベルジョ＝ブラクレは、ヨーロッパにおけるイスラーム主義の展開について警告を発する『ムスリム同胞団の思想とそのネットワークに関する調査』(*Le frémisme et ses réseaux, l'enquête*)を二〇一三年一月に刊行した。その内容に関して著者は学術的な観点からの批判のみならずソーシャル・メディア上での誹謗中傷にもさらされ、死の脅迫まで受けたために、警察の保護下に置かれる事態に至っている。

小村明子の論文は、日本でのハラール・ビジネスの特徴が、国内のムスリムを対象とするものというより、おもに東南アジアからの観光客を当て込んで注目され、発展してきた点にあることを論じている。しかしそのことにもともなうさまざまな問題も生じ、かなり混乱した状況に陥ってしまったことが指摘されている。コロナ禍のために外国人観光客を当てにしていたハラール・レストランは苦境に立たされ、ハラール対応製品を輸出しようにもそこには大きな壁がある。小村は、コロナが収束すればムスリム観光客の足も戻ってくるはずだが、その際には以前の混乱した状況に再び陥ることなく、ハラール対応の改善がなされるべきであると述べている。

以上のように、本書にはフランスと日本におけるイスラームを妥当に比較するために必要と思われる論考や各論的なテーマに関する論考が収められている。編者としては、多様なテーマをカバーしつつ、それなりの求心性を備えた論集に仕あがっていればと願っているが、扱うべきテーマは他にも多いと感じている。「比較しがいなもの比較」に一定の貢献ができていればと思うが、それはこの先の研究においてさらに深められていくべきものでもあるだろう。本論集が研究者にとって、また一般読者にとって、ひとつの道標になっていれば幸いである。末筆ながら、イスラームをテーマとする日仏シンポジウムという野心的な企画を持ちかけてくださったベルナル・トマン氏、またシンポジウムおよび論集に快く参加してくださった登壇者および寄稿者の方々に改めてお礼を申しあげたい。本書刊行の意義を認めて編集に当たってくださった水声社の井戸亮氏と板垣賢太氏にも感謝している。そして本書が、水声社の「日仏会館ライブラリー」*« Bibliothèque de la Maison Franco-Japonaise »*のシリーズに収められることになったことを、編者として嬉しく思っている。

〔註〕

- (1) 三浦信孝・福井憲彦編『フランス革命と明治維新』白水社、二〇一八年。
- (2) シンポジウムの準備の過程で、フランス側の人選を決めていくのと並行して、フランスにおけるイスラームの研究状況をまとめた。オンラインでダウンロードできるので、合わせてご覧いただければ幸いである。伊達聖伸「フランスにおけるイスラーム言説と研究の諸相——政治・社会・思想・日常生活」『東京大学宗教学年報』三九号、二〇二二年、二二―四五頁。